

一八世紀後半から一九世紀前半にかけて活躍したドイツのキリスト教の思想家F・D・E・シュライエルマッハーは、今世紀前半にはわが国においてよく知られた名前であった。日本に紹介された最も早い彼の業績は教育学の分野のものである。近代教育学の古典的存在として認知された彼の思想は日本においても注目を浴びるものであった。また西田幾太郎とは異なり専らキリスト教的立場からの哲学的思索を深めた波多野精一、また九州大学の佐野勝也などを中心とした彼の宗教哲学の紹介は、わが国におけるシュライエルマッハー研究の水準を高めた。

このうち青年期の代表作「宗教論」(一七九九年第一版)の翻訳紹介は、今世紀初頭以来合わせて六人の訳者により、改訂版を含めると七種類のものが現れている。このような現象は直接ドイツ語の原文を読む機会の少ない日本では珍しいことではない(一八〇〇年に第一版の出た「独白録」の翻訳も同じような状況にある)。特に文学の領域ではその例は多く見られる。しかし、これ

はわが国独特の翻訳文化にまつわる出来事であり、これらの翻訳が原著の思想をどのように伝えたのか、またそれを我々はどうに受容したのかという興味ある論題を提供している。この「宗教論」で、シュライエルマッハーは

シュライエルマッハーとわたし

水 谷 誠

間のコミュニケーションに関する興味はつきない。

ただしもちろん、これらの紹介はシュライエルマッハーの思想の全体をカバーしているわけではない。シュライエルマッハー

は一七六八年に現在のポーランドに生まれ一八三四年にベルリンで他界した。死後、直ちに全集の編集が始まり、三〇巻にまとめられた。この全集は神学、説教、哲学という三つの部門に整理されている。この整理からも理解できるように、彼の思想は神学と説教に重要な場所を持つ。生涯の後半にはハレ大学神学部教授として、また一八一〇年のベルリン大学創立に参画し、初代の神学部長として研究・教育に携わった。その間ベルリンの三位一体教会の牧師として礼拝説教を続けている。近年このシュライエルマッハーの神学的側面に光をあてた研究がわが国でも進んでいるのは喜ばしいことである。

この近代プロテスタント・キリスト教の代表的思想家に、大学院以来、断続的にではあるが関心を向け続けている。一人の思想家を学ぶ場合に、晩年の体系化されたものを探究することはもちろん重要であるが、同時にその人が一体どのような仕方、どのようなプロセスを経て自らの思想的営みを展開、成熟させていったかを探ること

もまた興味深い。とりわけシュライエルマ

ツハーという人は、青年期に、種々の精神潮流と接触する中で与えられた成果を、まき散らすような仕方で作著し、その思想を発展させていった人である。さきほどの「宗教論」にしても、生涯において二度大幅な改訂をしている（この書の邦訳は残念なことに初版に集中している）。私の場合、シュライエルマツハーへの関心は、後年の著作から入り、若い時代に遡るという経路を辿ってきた。大学院修士課程で後期の代表作「信仰論」研究の指導を受け、その後「宗教論」（初版）に関心は移った。しかし、どのように繰り返し読んでみても、内容に不鮮明なところが残る。必然的にどのような状況の中で、どのようなプロセスを経て著作されたのかに関心は向かい、そしてその時期の思想を形成したさらに若い時代の彼を探索しようとする。そのような仕方では、現在、彼の思想的営みの最初期に目を向けている。しかしこれには今まで二重の困難がつきまといってきた。一つは資料の問題、もう一つはドイツ語を外国語とする際に生

じる困難である。

研究史的に見れば、初期シュライエルマツハーの思想を解明する営みは特別の制約を受けてきた。死後出た三〇巻の全集は、公刊された著作の最終の版を底本にするという編集原則を持っていた。そうすると「宗教論」のように内容が改訂されていくたぐいの著作のルーツを辿ることは難しい。しかもこの全集は著作類の全体を網羅するには程遠いものであった。その結果、直接に関連する数少ない資料の他、副次資料をも駆使して得られた種々の断片的な結果を、研究者が自らの想像力に頼ってまとめあげるといったぐい研究が少なくなかったのもやむをえない。しかし、いずれにしてもこの態度は、彼の思想を擁護する側にも、批判する側にも、事柄に即するという原則に背を向ける危険を招くことになる。そこで近年はベルリンの資料館などで発見された手書きの原稿類をも材料にして突っ込んで解明する作業がなされてきた。しかし、ドイツ語を自国語として処理する人々にとって、手書きの原稿を読むには特別の訓

練を必要とする。たとえ現地に赴くことができたにしても、拡大鏡をも使わなければならないほどに細かい字で書き記されたこれらの文書類を判読するのは外国人である我々には至難の業である。

しかしこの事態は、一九八〇年以来刊行が始まった新版の全集によってようやく解決に向かうことになった。一年に一冊程度の遅々とした歩みであるが、入手困難なものを優先的に出版するという方針に従って、初期シュライエルマツハーの著作類が現れつつある。今後は校訂を受けて印刷された読みやすいものを使って研究を進めることが可能になった。「宗教論」成立の過程を探索することも自らの努力次第という状況になっているのである。

（大学神学部専任講師）

今年はコロンブスの「新世界発見」五〇

〇周年にあたっており、スペインをはじめイタリア、アメリカ合衆国、ラテンアメリカ諸国など世界各地でこれに関連する行事がすでに催され、あるいはこれから行なわれようとしている。同志社大学ですでに人文科学研究所の主催で「コロンブスとその時代」と題して公開講演会がもたれ、筆者も講演者の一人として報告した。そこでは、近代ヨーロッパが誕生するうえでコロンブスの事業がもつ歴史的意味を具体的に探ることをテーマとして述べたつもりである。しかも、それを近代ヨーロッパの「裏面史」としての奴隸制史・大西洋奴隸貿易史の視座からアプローチした。

ところで、この近代奴隸制史・奴隸貿易史という研究テーマは、欧米では一九六〇年代後半とりわけ七〇年代以降、社会経済史の重要な研究分野の一つとなり、数多くの気鋭の研究者たちが多様な視座からこの問題に取り組んできた。取り扱う時期としては一五世紀後半から一九世紀末までを包含し、関連地域もヨーロッパ、南北アメリカ、

アフリカと広範囲であるから、この二〇年間にかなりの研究蓄積がなされてきたにもかかわらず、いまだに未知の領域が多く、あるいは、すでに取り上げられたテーマでも、方法論や資料の読み込み方の違いから意見の相違が生じている。

とくに最近の傾向は、イギリスやアメリカ合衆国をはじめとする欧米の研究者ばかりでなく、アフリカやカリブ海地域、ラテンアメリカの研究

近代奴隸制史・奴隸貿易史

布 留 川 正 博

る。その理由を推し量るなら、こうした諸地域の「低開発」の現状を奥深く剔出するためには、それぞれの地域の歴史的過去を振り返り、それを当時の世界的文脈のなかに位置づける必要があるからだ。このテーマ

はこうした問題意識と相即不離なのである。ひるがえって日本でこのテーマを本格的に取り組もうとしている研究者は、管見ではまだほんのわずかだといわざるをえない。なぜか、理由はいくつか考えられる。まず、新しい研究領域であること。すでに触れたように、欧米でも研究分野として認識されはじめてからまだ二〇年余りしかたっていないことがある。しかも、これまで蓄積されてきた研究業績を日本ではまだほとんど吸収できていないのが現状である。筆者もここ一〇年ほどこのテーマと取り組んできたが、漸く最近になって近代奴隸制と奴隸貿易の輪郭がぼんやりと描けるようになってきたところである。

また、広範な地域を含んでいて、研究課題として取り扱いにくいという点がある。ヨーロッパのなかで奴隸貿易に参画したのは、時代順にポルトガル、オランダ、フランス、イギリス、スペインであり、このほかこれより規模は小さいが、スウェーデン、デンマーク、ブランドンブルクなども含まれる。奴隸積み出し地域としてのアフリカ

「私の研究」

でも、セネガル、ガンビア、ベニン湾沿岸、ビアフラ湾沿岸などを含むいわゆる西アフリカだけでなく、その南のコンゴやアンゴラ、さらに東アフリカのモザンビークなども射程に入れなければならない。奴隷受け入れ地域は、カリブ海諸島、ブラジルを中心にしてほぼ南北アメリカ全域に及ぶ。よしこのテーマで研究しようと決意しても、一体何から始めるべきなのか。難しい選択を迫られるわけである。

こうしたこともあわせて、従来の一国史観的な枠組みのなかに、このテーマは収まりそうにない。これも取り組みにくい理由の一つにあげられる。つまり、イギリス史であれフランス史であれ、はたまたアメリカ史であれ、その枠外にはみ出る部分が多いわけである。しかも、このテーマは歴史学の一分野としてそれに包摂されるといえども、たんなる経済史ではなく、法制史、思想史、政治史としての側面も色濃くもっているのである。

そしてさらに、すでに述べたとおり、このテーマは近代ヨーロッパの「裏面史」と

しての性格が強い。しかし、何故に裏面なのか。裏面と表面との関係性はいかに捉えられるべきなのか。たとえば、以前に「イギリス産業革命と奴隷制」というテーマで学界動向を探り、今後の研究方向を展望したことがあるが、そこでは「イギリス産業革命」が光であり、「奴隷制」は陰であった。これは、一言でいえば、英領西インド諸島の奴隷制を歴史的前提としてはじめてイギリスで産業革命が起こったとするものだ。しかし、こうした指摘そのものが比較的新しく、近年「従属理論」や「世界システム論」が学界の一部で受け入れられつつあるとはいえ、旧来の歴史学に対する挑戦となっていることも確かである。

以上の諸点、すなわち、新しい研究分野であること、時間的・空間的に広範囲であること、一国史観を脱却しなければならぬこと、歴史学の多様な側面を包含すること、近代の裏面史であること、(しかし、奴隷制は近代の通奏低音といえるかもしれない)、旧来の歴史学に対する挑戦であること、これらは日本における研究が立ち遅れている

理由として列挙したのであるが、むしろ逆に少なくとも筆者にとつてこのテーマの学問的魅力を語る結果となってしまった。

最後に、これから取り組もうとしているもう少し限定されたテーマについて触れておきたい。それは「アポリシヨニズム」の研究である。すなわち、イギリス産業革命期における奴隷貿易廃止、奴隷制廃止運動については、例のチャールティズム運動に勝るとも劣らない国民的大運動であったにもかかわらず、日本ではこれまで等閑視されてきた。この運動を担った人々ほどのような階層、団体に属すのか、また、どのような理念、心情、思想に基づいて行動したのか、どのような経済的利害がからんでいたのか、さらに、西インド諸島の奴隷反乱がいかなるインパクトを与えたのか、など総じてイギリス産業革命とアポリシヨニズムの関係性を探りたいと考えている。そのうえで、このアポリシヨニズムがイギリスの労働者階級の形成にどのような作用を及ぼしたのかを粗上にのせたい。

(大学経済学部専任講師)

レーザーを用いた光エレクトロニクス・光コンピューティングの研究を行っている。光通信を始めとする、進歩したレーザー技術の話題は一九八〇年代を通じて「ハイテク日本」を代表する分野の一つとしていろいろな機会に耳聞された読者も多いかと思う。今日二一世紀の到来を目前に控えて、レーザー技術に残された課題の一つは「位相安定レーザー」の実現である。ご承知のように、レーザーそのものの本質は光であるが、実は光は電波の一種である。電波の正体は交流の電気信号であり、交流とは時々刻々その電圧が規則正しい法則で変化しているような電気である。どのような法則で変化しているかと言えば三角関数の正弦波の形をしている。ラジオやテレビジョンの放送電波も電波であるからには全く事情はこれと同じである。我々がラジオの放送局を選んだりテレビジョンのチャンネルを切り替えて様々な放送番組を楽しむことができるのは、それぞれの放送電波が持っているサイクルが決まっているからである。このサイクルのことを周波数と言い、

位相安定レーザーの実現

佐々木 和可緒

中波のラジオ電波の場合はおよそ一〇〇〇キロヘルツ、テレビジョンの電波ではおよそ一〇〇メガヘルツである。「キロ」と「メガ」は千倍違う単位であり、結局テレビジョンの電波は中波のラジオ電波より約一〇〇倍周波数が高いということになる。よく知られているように、テレビの放送電波にはステレオ放送や文字放送などテレビジョン本来の映像や音声の他に様々な情報が乗せられている。一方、中波のラジオ電波にはテレビジョンのようないくつかの映像や文字放送を送出するといったことも困難である。この違いはどこから生ずるのかと言えば、周波数の違いである。すなわち、電波を情報伝達の手段として用

いる場合、周波数の高い電波であればあるほど、乗せられる情報の量を増やすことができるのである。先ほど光も電波の一種であると述べたが、光の周波数はどうであらうか。目に見える可視光の周波数は約五〇〇テラヘルツである。「テラ」は先ほどの「メガ」の百万倍の単位である。従って電波の一種としての光は、中波のラジオ電波の約五億倍、テレビジョンの電波の約五百万倍の周波数を持つということになる。わずかに一〇〇倍周波数の異なるラジオ電波とテレビジョンの電波でさえ乗せられる情報量に相当の差があることは既に述べた。このことから類推しても、電波としての光がいかに情報伝達の手段として多くの可能性を秘めているかがわかるであらう。

さて、このように実用上大変有益に思われる光であるが、実はその可能性を充分活用するには重大な問題がある。日頃我々が目にするこの「光」——太陽光や蛍光灯の光スポットライトの光などは全て、先ほど述べた電波としての周波数が一樣には無いのである。ラジオやテレビジョンの

電波が遠方まで色々な情報を乗せて届くのは、その電波の周波数が一定であればこそ可能な芸当なのである。それゆえ、このままでは光はどのような情報伝達などの用途には利用できないことになる。レーザーとは、光でもラジオやテレビジョンの電波と同じように一様な周波数の電波として作り出せるように工夫した装置である。人工の光であるレーザー光線が見せる、太陽光や蛍光灯の光などでは見られない特異なふるまいは全て、光でも規則正しい周波数を持つているという特質に起因しているのである。

このようなレーザー装置の技術は一九八〇年代に飛躍的に進歩し、冒頭で述べたように光通信を始めとして、ビデオディスク装置やCDプレイヤーなど民生機器にも幅広く利用されるに至っている。ところが、通常のラジオ電波の約五億倍という、途方もない周波数の電波の特性をフルに引き出すそうとすると、現在のレーザー装置の持つ規則正しさでは不足なのである。本稿の初めの方で、電波の姿は三角関数の正弦波で

あると述べたが、数学で教える正弦波はそのサイクル（周波数）が完全に規則正しい波である。時間が永遠に経過しても狂うことは無い。ところがレーザーの光はその規則正しさがかなり狂うのである。規則正しい正弦波のサイクルのタイミングのことを位相という。数学の教科書に出てくる正弦波は、周波数が完全に一定でかつ位相が正確な波である。これに対して現実のレーザー光線は周波数も位相も不安定である。科学技術や産業の分野でのハイテクの進展により、レーザーの正確さに対する要求も増大しており、とうとう現状のレーザー程度の正確さでは役に立たない局面が生ずるに至った。

日本では東海大地震がいつ起きるかという心配が長年議論されているので、大陸移動説を耳にされた読者も多いだろう。大陸移動の原因が大地震を引き起こす原因でもある。さて、この説が正しいとすると日本列島と北米大陸の間の距離は毎分約数センチの単位で動いているはずであり、これを上空に打ち上げた人工衛星にレーザー光線

を当ててリアルタイムで計測しようという研究がある。数万キロメートルの内の一センチメートルの変化を検出しようというわけである。これを達成するためには先ほど述べた光のサイクルのタイミング（位相）が一〇億分の一狂っても正確な測定はできないわけ、現在のレーザーの性能の限界である。位相安定レーザーはこのような要求に応えようというもので、現状で達成できる高度なエレクトロニクス技術はもちろん、一九九〇年代に入って進歩した量子力学の不確定性原理に対する新しい考え方、さらにはカオスの理論などを適用して性能の向上を図っている。このようなレーザーが実現できると、上述のような精密計測の分野を始め、現在電気信号で情報処理しているコンピュータの機能のすべてを光に置き換え、コンピュータの大きさは現状の何百分の一にしながら、能力は何百倍にもできる光ディジタル演算の実現など、まさに二一世紀を担うハイテクの多くの分野で相当な進歩に貢献できるものである。

（大学工学部専任講師）

「ヨブ記」を読んで、本当の意味で「おもしろい」と実感したのは、いつ頃からだったろうか。私の読みが「机上の学問」であった間は、そうではなかった。牧会での、人間の呻きや叫びに直面して立往生させられた、その経験が、私に「ヨブ記」への新しい読みへの可能性を開いてくれた。

聖書の記事を「おもしろい」と表現するのは、不敬度の誇りを免れないかも知れないが、聖書が私たち現代人に挑戦してくる問題提起の鋭さ、という点で、ヨブ記に勝るものはない、と思われるので、敢えてこのような表現をさせて頂くのである。聖書解釈学の歴史やその方法については、日進月歩、専門家でさえ、その変化の激しさや多様性についていけないほどの、最近の神学の学的傾向である。しかし、問題は要するに、昔も今も、「聖書がいかなる意味で神の言葉たりうるのか」、「そもそも神とは何か」、「人間とは何か」ということである。つまり、神と人間のかかわり方の問題なのである。このような基本的な問題が押さえられないまま、聖書のテキストを歴史的、

ヨブ記を読む楽しみ

近 藤 十 郎

批判的に分析したり、編集の歴史を系統的に明らかにすることが出来たとしてもあまり意味は無いのではないか。最近の聖書解釈学の成果には、目を見張るものがあることを認めないわけではないが、「神と人間の問題」が、どこかに置き去りにされているのではない、という危惧も無いわけではない。このような問題を言い出すと「それは教義学の問題だ」として、聖書学プロパーの問題からは、度外視されてしまうかもしれない。しかし、現実の人間の状況は、研究者たちがそれぞれの学問的な領域の違いを云々している状況ではないのではなからうか。

「ヨブ記」のヨブは、このような、神の問題、人間の問題に真正面から取り組もうとした。このテキストがいつ、どこで、だれによって書かれたか、また、私たちの聖書の「正典」となるまでに、どのような紆余曲折があったのか、といったことについての、学問的な研究が無意味であると言っているわけではない。ただ、これらのことが聖書解釈学のゴールであるかのように思うのは正しくない、と言いたいのである。問題は要するに、普遍的な意味での人間の問題、神の問題なのである。聖書学の立場であれ教義学の立場であれ、問われているのは同じである。私にとって最も重要なことは、「神が人間の問題提起に対して、どう答えられるのか」、というただ一点に尽きる。ヨブ記は、聖書の他のどのテキストにもまさって、この問題に関心を集中させているように思われる。問いの矛先をわざとらしく逸らしたり、曖昧なままに煮え切らない態度に終始したりするのではなく、最後のところでは、神は神らしく堂々と人間の挑戦を受けて立っている。そこがまた、ヨブ記の持つ魅力の一つである。ただその場合でも、人間の挑戦を受けとめようとするそ

の受けとめ方が、じつにユニークである。ある旧約学者は、ヨブ記の物語における悲劇性のかわりに、独特な意味での喜劇性があった、この喜劇性を味わい知ることが出来る者のみが、知恵文学の粹としてのヨブ記の価値を評価出来るのだ、と言っている。

この物語の提起している問題は、一口で言えば、人間の生における不条理の問題である。個人のレベルにせよ社会的なレベルにせよ、このような不条理の問題が人間の生を無意味なものにし、底無しのニヒリズムを産み出すことは、誰でも知りかつ経験しているところである。ヨブ記は、このような普遍的な人間の問題意識を、象徴的に代弁する作品と言ってよいであろう。ヨブが経験した苦難は、全財産を失うことであったり、不慮の災難のために息子娘を失ったり、堪え難い肉体の苦しみを味わうことであったりしたが、問題は、決してこれらのことだけではない。これらのことに誘発されて生じた意味喪失の問題こそ、彼にとつて最も深刻な問題だったのである。現代の神学が、この人間の意味喪失の問題にど

れだけ答え得るのか、その辺の問題に確たる方向性が示されない限り、神学することの意味が希薄になるのではないかと私は思う。ヨブ記の物語は、このような人間の普遍的な問いに対して、有益な示唆を与えている。この物語を読んでいて気が付くことは、神はヨブの問いに代表される私たち人間の問いに対して、決して安易な答えを用意しておられない、という点である。旧約聖書の「知恵」が多くの場合人間の経験の積み重ね、先人たちの教えや教訓、その背後にある神の経綸といったオーソドックスな考え方を反映しているのに対し、ヨブ記の知恵は、このような考え方ははるかに凌駕している。神は、人間の知恵からまったく自由であり、中途半端な因果論などによつては、とうてい把握され得ない存在である。天上の世界で、人間性の本質の問題をめぐつて、あろうことかサタンと取引をするほどに、神は「自由な」存在である。また、このサタンを野放しにして、ヨブと友人たちの神や人間をめぐれる問題についての議論を操らせるほどに、この神はサタン

に対して寛容である。みずからの被造物に対して、一見無責任と思われるほど、この神は、ヨブの、そして人間の問いに対して寡黙であり、その姿を隠したままである。このような神が、人間の絶望の極まるところで、創造の神としての圧倒的な迫力をもつて、自己を啓示する。三十八章以下に登場する神の姿が圧巻である。不条理は依然として、不条理のままではあるが、読者は、この神の前に不思議なほどなつとくさせられてしまうのである。容易なドグマを語ることは、誰にでもできる。すべてを運命や摂理、因果の法則に帰することは簡単なことである。しかし、人間の問題は、これらの論理性によつては、何一つ解決しないことを私たちは知っている。驚くべきことに、神が「隠された神」(deus absconditus)から「現された神」(deus revelatus)へと変身して自己を啓示するときの圧倒的な迫力を、ヨブ記の作者はすでにみずからの信仰のうちに体現していた。これらのことを学ぶことが出来るがゆえに、ヨブ記は「おもしろい」のである。

(女子大学教授)